

東京夜光

「世界の終わりで目をつむる」

作..川名幸宏

「世界の終わりで目をつむる」

○登場人物

橋本 光 …フリーター。

三河 瞳 …会社員。宗教家。

末松憲仁 …映像製作会社勤務。光の大学の先輩。

末松真希 …憲仁の結婚相手。光の大学の同期。

大戸翔平 …会社員。光の大学の同期。

斎藤和夫 …大学生。

黒木頼子 …会社員。宗教家。瞳の友人。

向井香織 …光の姉。

向井武士 …光の義兄。

隣の男

序幕・アパート

12月。

都会の喧騒の裏手に取り残されたように佇む、

四畳半一間の木造アパート。

風呂なしトイレ共同。

部屋は布団を敷くだけでいっぱいいっぱいである。

朝方、部屋の住人、橋本光が帰ってくる。

深夜のアルバイト終わり。

昼夜逆転生活が馴染み、目が冴えている。

朝日が昇る。

窓の外は、隣の住宅の壁が接近していて圧迫感があり、

朝日は直接入ってこないが明るくなってくるのは感じる。

隣の住人の唸り声がある。

毎朝聞こえるこの声。

光がつくりあげた三畳一間の世界を、

唯一妨害してくる耳障りな叫び。

日々の業務のように、壁を叩いて「やめろ」と意思表示。

カーテンを閉めて布団に入る。

誰かが戸を叩く。

ここに越してきて初めての来客。しかもこんな朝方に。

光ははじめ、居留守を決め込む。

しかし、あまりにもしつこい。

仕方なく、戸を開けてみる。

光「はい？」

瞳「え？」

光「……あ、え……はい？」

瞳「あ、あの……」

光「はい」

瞳「えと、その……鈴木くんは？」
光「鈴木くん？」
瞳「鈴木くんは？」
光「いや、ちよつと、え？」
瞳「……」
光「鈴木くんって？」
瞳「……」
光「……」
瞳「あれ？」
光「いや、なんか、すみません」
瞳「鈴木くんの……？」
光「あ、その、僕、全然、鈴木くんわからないです」
瞳「え？」
光「他人です。多分」
瞳「私、ちよつと、その、用があつて」
光「いや、だから、僕全然わかんないです、はい」
瞳「……あれ？」
光「部屋、間違つてませんか？」
瞳「いや、ここです」
光「え、あ、じゃあ」
瞳「ここです」
光「……はい」
瞳「……はい」
光「……あ、その、僕、3ヶ月前ぐらいに引っ越してきて」
瞳「……ああ」
光「前任んでたつてことですかね？」
瞳「あ、じゃあ多分、そういうことになるんだと思います」
光「すみません、なんか」
瞳「いやいやこつちが」
光「……えーと」
瞳「あ」
光「え？」
瞳「あ、その、新聞」

光「新聞？」

瞳「新聞って？」

光「ああ、この新聞の？」

瞳「あ、すみません、知らなくて」

お互い一瞬だけ、緊張感が漂う。

光「……ああ、こっちもその、連絡とか、すればよかったですけど」

瞳「いやいや」

光「……これ、返します？」

瞳「あ、もう、大丈夫ですんで」

光「あ、じゃあ」

瞳「読みました？」

光「……その、まあ、ちょっと」

瞳「なんか、その」

光「いやいや」

瞳「あの」

光「え、ああ」

瞳「……むしろ、それ、じゃあ差し上げますんで」

光「あ、すみません」

瞳「えーと、あ、じゃあ、朝から、なんか」

光「いやいや、全然。むしろお力になれずに」

瞳「そんな。ということ、すみません、失礼しました」

光「はい。はい。失礼しまーす」

戸を閉めて瞳去る。

呼吸が荒い。手が震えている。

新聞を手にとって、一応中身を確認する。

戸をもう一度ゆっくり開けて、瞳が去ったことを確認する。

そこに彼女の匂いが残っている。

光はその匂いを感じる。

この世の果てには場違いな匂い。

戸を叩く音。
はっとする光。
急いで平常心を取り戻そうとする。
戸を開けると瞳がいる。

瞳「あ、あの」

光「え、あ、はい？」

瞳「すみません、何度も」

光「あ、いや、別に」

瞳「さっき」

光「え？」

瞳「さっき、それ、読んでくださったって」

光「あ、これ」

瞳「その、読んでくださったんですね？」

光「え？あ、でも」

瞳「全然、あれなんですけど」

光「でも、見出し、見出しぐらいで」

瞳「興味とか、どうです？」

光「は？」

瞳「興味？」

光「えー、まあ、どうでしょう」

瞳「どうなんでしょう？」

光「んー、どうでしょうね？」

瞳「…もし、あれだったら」

光「いや、でも、僕そういうのわかんないんで」

瞳「みんな最初そうですねから」

光「あ、でも、本当に、わかんないんですよ」

瞳「…そうですね」

光「はい。ちよっと、ごめんなさい」

瞳「そんなにですか？」

光「はい、そんなにだと思っんですけど、あの、ごめんなさい」

瞳「(少し笑う)」

光「え？え？何ですか？」

瞳「いや、全然、その」
光「はい」
瞳「なんか、ちよつと、変ですよね？」
光「は？」
瞳「いや、さっきから」
光「え？変ですか？」
瞳「あ、その、なんですかね？いや、ごめんなさい。だいたい、なんかも
つと冷たく断られるんで。その、どっちかわかりにくいっていうか」
光「あ、でも、僕、その、ダメです。やっぱり、ダメです」
瞳「そうですよねえ」
光「……はい」
瞳「じゃあお名前だけ、いいですか？一応」
光「橋本光です」
瞳「……は？」
光「……え？」
瞳「……あ、いや、あの、こっちから言うのもなんなんですけど、言わな
い方がいいんじゃないですかね？興味ないんですよ」
光「あ、え？」
瞳「え？名前」
光「あ、ああ」
瞳「ちよつと」
光「えーと…あれですね、その、興味はあるかもしれないです」
瞳「え？……あ、じゃあ」
光「違います違います」
瞳「え？何が？」
光「だから、その、こういうものには、僕、その、ダメなんですけど。そ
の、単純に、(瞳をさして)、に興味あるかもしれないです」
瞳「はあ？」
光「あ、ごめんなさい、それだけです、はい」
瞳「ええ」
光「ああ、なんか、すみません、夜勤明けで、多分変な感じで」
瞳「んー」
光「……はい」

間

瞳「……え、じゃあ、どうします？」

光「どうしましょう」

瞳「どうしましょうね」

光「はい」

瞳「……」

光「あのー、やっぱり大丈夫です、ごめんなさい」

瞳「え？そっちから引くのなんかずるくないですか？」

光「いや、別に引くっていうか」

瞳「今、さっと引いたでしょ」

光「……まあ、引きましたね」

瞳「うん」

間

光「あ、じゃあ、一応、連絡先だけ、聞くんっていう感じにしますか？」

隣の部屋から唸り声が聞こえる。

朝が近づいてくる。

一場・居酒屋

3月。

古びた大衆酒場。

光たちの大学時代の行きつけの店であり居心地はいい。

末松憲仁とその妻、末松真希、大戸翔平、斎藤和夫が、酒を酌み交わしている。

憲仁「でもやっぱりさあ、あの海の撮影な」

大戸「はい」

憲仁「燃えたなあ」

大戸「いやーそうですね」

憲仁「逆にさ、大学時代の思い出あそこしかないもん俺、な？」

大戸「はい、僕もそうかもしれないです」

斎藤「なんか、そういうの、いいですねえ」

真希「またそうやって大げさに言ってる」

大戸「いや、でも、あれはさ、俺ら1年で雑用ばっかだったけど、なんか

最後泣いたよなあ」

真希「まあ、そうだったけど」

憲仁「こいつがヒロインでさ」

真希「ちよつと、いいよ、もう」

大戸「斎藤くんはさ、撮るの？これから」

斎藤「今年は、就活なんで」

大戸「あ、そっかそっか」

憲仁「決まったら撮った方がいいよ」

真希「うん、撮った方がいい」

憲仁「会社入ってさ、撮影とかで、まあ別に海行くしさ、なんならカメラも全然いいカメラだし、いい絵撮れるんだけどさあ、なんだろうなあ、

あん時ほど熱くなれないもんなあ、不思議なもんで」

斎藤「観ました、会室にあってる」

大戸「あ、観たの？」

斎藤「最後、海で、ずーっとワンカットで、鳥肌立ちました」

憲仁「だろ」

斎藤「はい」

憲仁「絵コンテは違ったんだけどさ、現場で、ああ、もうワンカットだなあって」

斎藤「降りてきたんですか？」

憲仁「まあそんなもんかなあ」

大戸「ちよつとちよつと末松さん」

憲仁「なんだよ」

大戸「いやいや」

真希「あれね、泣く泣くあんなったの」

斎藤「え？」

大戸「光ってポンコツがいてさ」

真希「光くんがカメラ一台海に落としちゃって、日も暮れちゃうからカット割ってる時間もないってこの監督が言い出して」

憲仁「まあ今考えれば不幸中の幸いだろ。あれで学生映画祭の準グランプリまでいったんだから」

大戸「まあ、終わりよければってことですかね」

憲仁「とにかくさ、映画って嘘をどれだけつくってる側が信じられるか、これに限ると思うのね。プロになるとさ、まあどこかでビジネスになっちゃうじゃん。やっぱりあの時は全員で血眼になって信じ切ってたからさ」

真希「あれ以来、賞取るまで光と口聞かなかったくせに」

憲仁「当たり前だろ。世の中結果が全てなんだよ」

真希「またそんなこと言って」

大戸「まあでも楽しかったのは楽しかったですからね」

憲二「そうだよな。よし、海行くぞ。卒業してから毎年行ってたのについてのまにかなくなっちゃっただろ」

大戸「確かに」

憲仁「そうだそうだ。今年は久しぶりにまた行くかあ、みんなで、な？」

大戸「いいですね」

真希「えー」

憲二「えーじゃねえよ。斎藤も来るか？」

斎藤「はい。そして、すみません、ちよつとトイレ行ってきます」

憲仁「ああ」

斎藤はトイレへ去る。

憲仁「面白いだろ、あいつ」

真希が上機嫌の憲二に「終電」の合図。

憲二「…大戸、俺らさすがに終電では帰るよ」

大戸「すみません、もうすぐ来ると思うんですけど」

憲仁「相変わらず何やってんだよ光は」

大戸「なんか予定があつて、顔は出すって言ってたんですけど」

憲仁「今何やってんの？」

大戸「週³でバイトしてるらしいです。まあでもそれ聞いたのも随分前で」

憲仁「あれだろ、風呂なしの三畳に住んでるって」

大戸「一回あいつんち行ったことあるんですけど、なんかもう、廃墟みたいで。逆によくこんな部屋見つけたなっていう」

真希「でも会社辞めてから結構経つよね」

大戸「5年ぐらい？」

憲仁「おい、大丈夫かあ、あいつ」

斎藤帰って来る。

斎藤「すみません」

憲仁「あ、じゃあ俺も行ってこようかなあ」

憲仁去る。

斎藤「…：…なんかすみません、お邪魔してしまつて」

大戸「いやいやいや」

真希「なんでなんで？」

斎藤「いや、せっかく、ご結婚祝いだつたのに」

真希「どうせあの人に無理やり誘われたんでしょ？むしろ私たちも大学生

と話せて楽しかったし。ね？」

大戸 「俺も結婚祝えって無理やり誘われたから同じようなもんだよ」
斎藤 「そんなそんな」
大戸 「つていうかOB訪問あの人で大丈夫？」
真希 「そうよ、大したこと言わないでしょ」
斎藤 「そんなことないです、勉強になります」
大戸 「まあ映研出て映像系に進んだのあの人ぐらいだもんなあ」
真希 「でもさ、今からそんなにこだわることもないと思うけどね」
大戸 「お、言うねえ」
真希 「あ、ごめんごめん、別に、そんな深い意味はないんだけど」
斎藤 「でも、僕、やっぱり、そういう仕事、したいんで」
大戸 「そっか」
真希 「そうだね、やりたいならやったほうがいいもんね」
斎藤 「はい」
大戸 「うん、そうだよなあ」
斎藤 「お二人は、その、どうやって諦められたんですか？」
真希 「え？」
斎藤 「あ、その、お二人は」
真希 「……いや、諦めたって(笑)」
大戸 「そうか、俺ら諦めたのかあ(笑)」
斎藤 「あ、なんか、すみません」
大戸 「いやいや、謝ることないって」
真希 「別に諦めたとか、そう言うことじゃないと思うけど」
斎藤 「そうですよね」
大戸 「そうだろうだ、せっかくだからさ、その、他にも普通のサラリーマンとOLに聞きたいこと聞いといたほうがいいんじゃない？」
斎藤 「あ、じゃあ」
大戸 「え、何？何？」
斎藤 「あの、お二人の、馴れ初めは？」
真希 「はあ？」
斎藤 「え？」
大戸 「いやいや当たり前だろ、結婚祝いだもん(笑)」
真希 「え、何？これ答えるの？」
大戸 「多分俺もよく知らないわ」

斎藤 「そうなんですか？」

大戸 「うん」

真希 「別に大したもんじゃないよ」

大戸 「前の彼氏は知ってたんだけどさあ」

真希 「あ、ちよっと」

大戸 「卒業してから2年ぐらいはなあ、そいっと」

真希 「あ、あ、あ」

大戸 「え？え？」

真希 「あの、それ、ダメ」

大戸 「は？」

真希 「え？」

大戸 「え？何？」

真希 「その話、なし」

大戸 「え？言っていないの」

真希 「うん、まあ、そう」

大戸 「なんで？別にいいじゃん」

真希 「なんか、ね、なんでだろうね」

大戸 「……いやまあ、なんとなくわからないでもないけど。末松さんちよ

つと嫌がるだろうしなあ」

真希 「でしょ」

大戸 「いやいやそういうの先に言っとけよ。あぶねえよ」

斎藤 「あの……聞いてよかったんですか？今の」

大戸 「ダメダメ」

真希 「うん、聞かなかったことにして」

斎藤 「あ、はい」

光が入ってくる。

大戸 「お」

真希 「あ」

光 「おう、久しぶり」

真希 「何？元気にやっつてんの？」

光 「まあ。あ、結婚おめでとう」

真希「ありがとう」

斎藤「初めまして。斎藤和夫です」

光「ああ、はい、橋本光です」

憲仁が入ってくる。

憲仁「おいーきたのかよー」

光「あ、お久しぶりです。ご結婚おめでとうございます」

憲仁「やつれたなあ」

光「いやいやそんな」

憲仁「なんだよーもう来ないと思って会計済ませてきちやったよ」

大戸「え」

憲仁「かつこよく去ろうと思ったのによお」

大戸「すみません、ごちそうさまです」

憲仁「せっかくきたけどさあ、でも俺ら終電」

光「すみません」

憲仁「お前最近何やってんの？フリーター？」

光「まあそんなところす」

憲仁「おいおい大丈夫か？彼女は？できた？」

光「ああ、その、まあ」

憲仁「え？いるの？」

光「まあ、そんな感じす」

大戸「ええ！聞いてねえよ」

光「いや、ほんと最近」

憲仁「なんだよなんだよ。ちよつとでも俺ら帰るよ今日はさすがに」

真希「うん。っていうか光遅すぎだよ」

光「ごめんごめん」

憲仁「あ、お前、今年の夏、久しぶりに海行くから。お前も来い。な？」

光「え？」

憲仁「そうだよ、彼女も連れてさあ」

光「えー」

憲仁「えーじゃねえよ」

光「じゃあ、まあ考えておきます」

憲仁「考えないでくるんだよバカ」

光「あ、はい」

真希「そろそろ本当にやばい」

憲仁「二人は？どうすんの？」

大戸「あ、俺、ちよつとだけこいつと飲んでいきます。せつかく来たのに

解散じゃかわいいそうだし」

真希「齋藤くんは？終電大丈夫？」

齋藤「あ、あと10分、10分ここにしようと思います。その、勉強になりますし」

憲仁「じゃあ、俺ら帰るよ」

大戸「はい。すみません、ご馳走になっちゃって」

真希「そうだよ、本当なら結婚祝いで奢ってくれてもよかったんだからね」

大戸「申し訳ない」

憲仁「じゃあな。光、海絶対行くぞー」

光「あ、はい」

憲仁「はい、じゃあ、お疲れー」

真希「じゃあ、またねー」

大戸「ありがとうございましたーごちそうさまでしたー」

齋藤「ごちそうさまでしたー」

憲仁と真希は帰る。

齋藤「……僕、店員さんに、もうちよつといるって言って来ますね」

大戸「ごめん、ありがとう」

齋藤「何飲まれます？」

光「生ビールを」

齋藤「わかりました」

齋藤は去る。

大戸「……お前さあ」

光「……なんだよ」

大戸「どうせ予定なんかなかったんだろ」

光「はあ？あったよ」

大戸「何があったんだよ」

光「……いろいろ」

大戸「子供じゃないんだからさ、普通に来ればいいだろ」

光「だから予定あったんだって」

大戸「あ、そう。で、まだあの部屋に住んでんの？」

光「うん」

大戸「ええ、じゃああれから全然変わってないんだなあ」

齋藤が帰ってくる。

大戸「ごめんね」

齋藤「いえいえ」

光「そっちは？」

大戸「ああ、まあ俺も特に。だから別に人のこと言えないけど」

光「そっか」

齋藤「……あの……」

光「はい？」

齋藤「監督の『ゾンビ大学』、観ました。会室に置いてあって」

光「え？」

大戸「あ、大学の後輩だから、この子」

光「ああ」

齋藤「すごいグワーってなりました、感情が」

光「あ、どうも」

大戸「こいつだよ、さっきの」

齋藤「え？」

大戸「ほら、あの元カレ」

齋藤「え？え？あ！ああ！」

光「なんだよ？そうだけど」

齋藤「それ、聞いてよかったんですか？」

大戸「あ、そっか」

光「え？別に今更いいだろ」

大戸「石橋、末松さんに言っていないんだって、お前と付き合ってたこと」

光「……」

大戸「お前さあ、どれだけ汚点なんだよ」

齋藤「……やっぱり全部聞かなかったことにした方がいいですかね？」

光「無理だろ」

齋藤「あ、ということでのこの辺で終電なんで、すみませんお先失礼します」

光「ええ」

大戸「ごめんな、遅くまで付き合わせちゃって」

齋藤「いえいえ、勉強になりました。こちらこそありがとうございます」

大戸「じゃあ、またどこかで」

齋藤「はい、失礼します」

齋藤帰る。

光「あれはどここの誰？」

大戸「俺もよくわかんない。就活で末松さんとこにOB訪問きたんだって」

光「なんか、夢と希望に溢れた目が鬱陶しかったな」

大戸「そういうこと言うなよ。まあ、鬱陶しかったけど」

光「……汚点かあ」

大戸「何？堪えてる？」

光「いや、汚点だよなあと思っ」

大戸「末松さんの方だって、よりにもよってお前となるとさ」

光「そりゃそうだよなあ」

大戸「仕事は？」

光「コンビニ、週3ぐらいで」

大戸「それバイトだろ。探してないの？」

光「困ってない」

大戸「いや、あの家じゃ困らないだろうけど。先のこととかさ」

光「俺、社会不適合者だから」

大戸「……あのさ、その言い方嫌いだなあ。ずるいよ」

光「は？」

大戸「完璧な社会適合者なんていないから。みんなどこかしら不適合だけ

ど、なんとかかだましましたまし折り合いつけてくわけじゃん」

光「適合してんじゃん、それ」

大戸「え？」

光「いや、だましましたまじできてんだからさ、それが適合じゃん」

大戸「お前さあ……というかよくそれで彼女できたよな」

光「……うん」

大戸「え？いるんだよね？彼女」

光「うん、まあ」

大戸「正直不思議だわ。お前みたいな感じで。よっぽど物好きだろ」

光「ちよつと変ではあるけど」

大戸「え？かわいいの？」

光「おう」

大戸「はあ？なんで？」

光「なんでって言うか、まあ、かわいいとは思う」

大戸「何してる人？」

光「不動産関係で、バリバリのキャリアウーマンって感じ」

大戸「……お前、それ夢だと思うな」

光「は？」

大戸「いや、そりゃ、あんなどこ住んでたらおかしくもなるよ。おかしい

よ、釣り合わないとか、格差とか、そう言う以前にさ、お前がだよ」

光「いるって。いるいる。実在する」

大戸「え、じゃあどこで知り合うの？お前が、そんな人と」

光「うちに来た」

大戸「はあ？」

光「その……まあ……その……」

大戸「え？」

光「あれ、勧誘みたいな」

大戸「勧誘？」

光「勧誘みたいな感じで」

大戸「……え？何の？」

光「……」

大戸「いや、え？何の勧誘だったの？」

光「……まあ、その、宗教的な」

大戸の顔色が濁る。

大戸「……ん？」

光「うん。そういう」

間

光「……なんか、世界が終わるんだって……」

大戸「ちよつと待ってちよつと待って」

光「らしいよ」

大戸「はあ……えーと、じゃあ、いつ？」

光「今年いっぱい。年末、どっか、日にち決まってる」

大戸「ああそう……（苦笑）」

小さなため息をつく大戸。

光「……ビール、来ないな。あいつ絶対頼むの忘れたよな」

大戸「……あのー……あのさ……聞いていい」

光「うん」

大戸「その、お前も、その、入って、え、入ってるってことなんだよね？」

光「ん？」

大戸「いや、その会みたいなのに」

光「……いやいや俺は違う」

大戸「え？」

光「入ってない入ってない。断った」

大戸「わかんないわかんない」

光「あ、だから、その勧誘来た時に、なんかわかんないけどいい感じとい

うか、まあそういう感じになって。でも勧誘自体は断って、それで、

それも許してくれてっというか」

大戸「ん？」

光「いや、普通よ、それ以外は。普通に、彼女みたいな。料理とかうまいし。あの、デートとかも行くよ。いや、何なら全部向こう持ちで、お

金はあるらしいからさ、なんかおこづかいとかもくれるし」

大戸「ちよつと待って、何？何なのそれ」

光「だから…付き合ってるっていう」
大戸「ああ…んー」

まじまじと光の顔を見る大戸。

光「……お前さ、大戸」

大戸「ん？」

光「……今ちよつと釣り合ってるといえば釣り合ってるなって思っただろ」

大戸「……思っていないよ……んー…まあちよつと思っただかなあ」

光「俺も……ちよつと思ってるところある」

大戸「……その……俺、どうしたらいい？」

光「え？」

大戸「あ、違うか。そのまあ、人それぞれだよな。うん。人それぞれだよ」

妙に自分の言葉に納得する大戸。

二場・アパート

5月。

アパートの前。

光の姉、向井香織が光に詰め寄っている。

香織「ちよつとお、関係なくないでしょお」

光「いや、もう、うわー、姉ちゃんに話すんじゃないわあ」

香織「こつちだつてね、関係なくいれたらいたいわよ、そりゃ」

光「だからほつといつてつてば」

香織「無理に決まつてるでしょ」

光「迷惑かけてるわけじゃないじゃん」

香織「どうしてこうなるかなあ。しばらくお金借りに来ないと思つたらこれだもん。というか、今までの、貸してるんだからね。あげてないのよ。貸してるのよ」

光「わかつてるつて」

香織「ねえ、もう一回確認するけど、あんたは入つてないのよね？」

光「そう」

香織「その、教えとか救いとか、そういうの信じてないんだよね？」

光「だから、そうだつて」

香織「で、どこ？」

光「ん？」

香織「あんたの家」

光「……もう勘弁してよ。今日来るんだつて」

香織「だから、お姉ちゃん会つてやろうつて言つてんじゃない」

光「ねえ、今度にしない？今日じゃないつて」

香織「あんたねえ……」

光「今度、ちゃんと、設けるから」

香織「あんたのさ、今度ちゃんとしていうの、実現したことある？」

光「……」

香織「今まで全部ずるずるずる引き伸ばしてきてさあ」

光「今度は、ちゃんとやるよ、やる」

香織「お父さんとお母さんに言うよ」

光「……」

香織「むしろなんでお父さんとお母さんに言えないことしてんのよ」

光「……」

香織「ほら」

香織が促して光が家に案内する。

アパートの入り口。

香織「ここ？」

光「そう」

香織「……」

光「入らないの？」

香織「あの、あんた、もうちよつとなんとかならなかったの？」

光「精一杯」

香織「あ、そう」

中に入って行く二人。

小声になる香織。

香織「これ、他に人住んでるの？」

光「多分」

部屋の中に入る二人。

光「……」

香織「ああ……」

光「何？」

香織「あの……隣、何？」

光「え？」

香織「ゴミが……ゴミが、すごいけど」

光「ああ、会ったことないけど、でも声は毎朝聞こえる」

香織「……」

光「引いた？」

気分が悪くなり、崩れる香織。

香織「……どうして……どうして」

光「やめてよ、感傷的になるの」

香織「光、やり直そう。今からでも全然遅くない。やり直そう」

光「は？」

香織「仕事探そう」

光「してるって」

香織「じゃなくて、ちゃんと働くの」

光「別に不自由してないから」

香織「あんまりこんなこと言いたくないんだけどね、あんまりにも惨めすぎると思う」

光「勝手に思ってるだけでしょ」

香織「逆になんで？なんでこうなってるの？」

光「なんとなく」

香織「何かの下積みとかだったらまだ許す。でもなんとなくはアウトよ」

光「……アウトって言われても」

ノックの音。

騒然とする香織。

光「きた」

香織「……」

戸を開ける光。

瞳がそこにおいて、黒木頼子もいる。

光「え？」

頼子「こんにちは」

瞳「ごめん、その、どうしても来たいって。あ、というか（香織をみて）」

香織「あ」

光「あ、姉です」

香織「光の姉の香織です」

瞳「ああ」

光「えーと、この人が」

瞳「すみません、三河瞳です」

光「それで」

頼子「黒木頼子です」

瞳「私の、その、友達というか」

頼子「すみませんね、急にお邪魔して。ちょっとあがってもいいですか？」

光「あ、どうぞ」

瞳「すみません、その、お姉さんいらっしゃるって知らなくて」

香織「こっちも急に来たので」

頼子「とつても、なんていうの、趣のある部屋なんですね。今時珍しくな
いですか？」

光「あ、はい」

瞳「やっぱり、私たち、日を改めます。ね、頼子さん」

光「うん」

香織「いいわよ」

光「え、いや」

香織「別に、私は大丈夫。せつかくお会いできたんだし。ね？そちらが嫌
じゃなければ」

頼子「お姉さんもこうおっしゃってくれてるし、いいんじゃない？」

瞳「でも」

光「あのー、そうですね」

香織「とりあえず、座ります？すみません、狭いですけど」

頼子「あ、じゃあ失礼しますね」

四人座る。

頼子「そのーあれよね、お二人はお付き合いしてるんだよね？」

光「まあ、その、一応」

瞳「うん」

光「まあ、そうですね」

頼子「瞳からね、ちょっとお話伺ったんだけど、光さんね、あなた悩んで

るって」

光「はい？」

頼子「え、だから悩んでるのよね？」

光「えーいやー」

頼子「ごめんなさいごめんなさい、あー、言い方変になっちゃうけど、いろんなことがうまくいかなくて無気力状態になってるって」

光「いやいや、そのーいやいや」

頼子「お姉さん、どうです？」

香織「まあ、そうですね」

光「はあ？え、ちよつと」

香織「はたから見たらそうでしょだつて」

頼子「でもね、安心して欲しいのは、あなたが、そうやって社会を憂いて絶望してること自体は、全く間違ったことじゃないのね」

光「ちよつと大げさじゃないですかね」

頼子「つていうのもね、もうすぐこの現世は滅亡するの。いやいや、これはわかっていることだから天文学的に。絶対に避けられない事実なのね」

香織「ちよつと」

頼子「落ち着いてください。いいんですいいんです、気持ちわかりますから。いきなりこんなことを言われても困りますよね、わかります。

でも確実に時は迫って来ているんですよ」

光「もういいですから」

頼子「あなたのように多くの人が本能的に終末を察して絶望しているんです。あなただけじゃないんです。でも、実を言うと、ただ打ちひしが

れているだけじゃ現世と一緒にあなた方自身も滅亡してしまうんです」

香織「え？」

頼子「はい？」

香織「いや、あなた方？」

頼子「あ、もちろんお姉さんですよ」

香織「はあ」

頼子「徳を積む必要があるんです。私たちと一緒に修行して徳を積みめば、滅亡後の来世で、私たちは救われて生まれ変わるんです。ちよつと

これを見ていただけますか？」

光「いいです」

頼子「じゃあ、お姉さん」

香織は新聞を受け取る。

頼子「それを読んでいただければわかるんですけどね、私たちの信仰は」

光「もういいですって！」

頼子「はい？」

光「あー、もう何回も何回も聞いてるんですそれ。瞳から」

頼子「そうそう、だから私来たのね。瞳さんの説明だとわかりづらいことも多かったと思うの」

光「十分わかりましたから」

頼子「あ、わかっていただけだったっていうこと？」

光「いや違う違う。そのー、何度も聞きましたけど、理解はできませんって言ってるんです」

頼子「ですから、もっとあなたがわかるように」

香織「あの！」

頼子「はい？」

香織「いい加減にしてもらっていいですか？」

頼子「えーと、はい？」

香織「その、申し訳ないですけど、嫌がってるじゃないですか」

頼子「え？そうですか？」

香織「いや明らかにそうでしょ。そのね、おたくらがやってることにとかく言うつもりはないんですよ、でもね」

頼子「いや、私たちはね、一刻も早くなるべくたくさんの人を救いたいって思ってる。だから強制とか、そういうことじゃ決してないんです」

香織「でも嫌がってるじゃないですか？」

頼子「はじめはね、確かに、みんな疑ったり、そういうこともあるのよ」

香織「あのー、出るとこ出ますよ」

頼子「はい？」

香織「いや、このまま続けるんだったら、出るとこ出ますよって言うてるんです」

頼子「出るとこって」

瞳「頼子さん、もう、ちょっと今日は帰りましょう、ね」

頼子「あなたそうやって引き伸ばして来たわけじゃない？」

瞳「いやちよっと」

頼子「ねえ光さん、あなたはさ、瞳のことどう思ってるの？」

光「……はい？」

頼子「いや、本当に思ってるの？思ってるのよね？」

光「……はい」

頼子「じゃあ言うんだけど、考えたことあるかな？好きな人に、自分の考
えてること全く信じてもらえないのが、どれだけ辛いのか」

光「いや、え？」

頼子「そんなのさ、はじめは嘘だっていいじゃない。でも相手のことわか
ろう、わかりたいって普通は思うんじゃない？そうでしょう？」

光「でもそれはちよっと」

香織「全く同じこと返したい」

頼子「は？」

香織「瞳さん？だっけ？え、本当に光のこと真剣に考えてる？」

瞳「え？」

香織「だって失礼だけど絶対これ目当てなわけでしょ。救うとかなんとか」

頼子「まってまって、救いたいって思うのは当然じゃない？」

香織「ちよっと静かにしてもらっていいですか？え、どうなの？」

瞳「そんな、目当てとかじゃ」

香織「はつきりしなさいよ。いいじゃないこの際。一応弟なのね。こんな
どうしようもない奴だけど、それなりに心配はするのね」

瞳「はい」

香織「ねえ、どうなの？その、あなた方の言葉でいうと、救ってあげたい
と思っただから付き合ってるのよね？」

瞳「……それは、そうです。はい」

香織「つまり、その会やら何やらに巻き込むためにつてことでしょ」

頼子「やっぱりダメよ、瞳、堕ちてる」

香織「そうなんでしょ、光？この子にあんたうまいこと乗せられたんでは
よ。ねえ？」

瞳「あの……」

光「いや、乗せられたって言うよりは」

香織「わかったわかった、あなたも今、知らないうちに多分そういう感じ

になってきちちゃってるから。でも、あっちから誘って来たのはそう
しょ」

瞳「あ」

光「…いや、どちらかといえは」

瞳「うん」

光「その、こっちから、に、なるのかな？」

瞳「まあ、でも、自然と、って感じもあって」

香織「そっか、知らなかったんだよね？彼女がこういう信仰があるって知
らなかったんだよね？」

光「えーと」

瞳「それは、その」

光「まあ、知ってたといえは知ってた。うん、その、知ってた」

瞳「そうね」

香織「……………は？」

光「うん、まあ、知ってた」

香織「わかったわよ、それはわかったけど……」

頼子「……………私には全くわからない……………瞳さ、あなたこの男のどこがいいの？」

瞳「……………どこって言われても」

頼子「じゃあ、そこまで貢いだりする必要がある？」

光「あ、それは」

頼子「ただでさえ滅亡が近づいて来て上納金も上がって来てるわけじゃな
い。それなのに、徳も何も積まないこの男にどうしてそこまでするの？」

香織「ええ」

頼子「おたくの弟さんが貢がせてるんですって」

香織「光、あんた」

頼子「ねえ、せめて言いなさいよ、どこがいいの？」

瞳「……………いやあ」

香織「あんたいくら借りてるの？」

光「いや、今急に言われても、パツとはわからないけど」

香織「いくらですか？返しますから」

瞳「別に貸したわけじゃないんです」

香織「繋がりが続けばうわけでしょ。それがこっちとしても嫌なんです」

瞳「そんなつもりじゃ」

頼子「返してもらいなさいよ」

瞳「いや」

光「返します、いつか、必ず、返しますから」

頼子「本当ね？本当に本当ね？」

光「はい」

香織「いつかできなかったことないくせに」

光「ちよっと」

香織「だから、お姉ちゃん立て替えるから」

瞳「本当に、貸したとかじゃありません。いいです。本当にいいですから」

香織「だから」

光「うん、姉ちゃんから借りるのは、ちよっと違うよ」

香織「は？」

頼子「こうしましょ。瞳はこの男に貢いだお金は忘れる。そうよ、きっと

あなたが徳を積むために与えられた試練だったのよ」

光「あ、その、いいんですか？」

頼子「はあ？」

光「すみません」

頼子「たださ、これでわかったでしょ。この男は救いようのない完全に向

こう側の人間なの。だからこれ以上瞳を傷つけないでちょうだい。も

う瞳に近づかないで。いい？これでいいわよね？」

香織「あんた、頭下げな」

光「違う。違うと思う」

香織「(光に土下座させて) 本当に申し訳ありませんでした」

頼子「行くわよ、瞳」

瞳「……嫌だ……それは嫌かも」

光「やっぱり、僕、そのー、少しずつでも返します。返しますから」

頼子「ちよっと」

香織「もう体で払ったら？」

光「は？」

香織「もうさ、この際、入ったらいいよ。その、会に。どうです？この子

救ってあげてもらえませんか？」

光「え、ちよっと」

香織「どんな人でも救済するんですよね、徳さえ積みば」

頼子「そうですけど」

香織「ね？」

頼子「でもこの人じゃ」

香織「この子、生まれ変わります。ね？生まれ変わるよね？あのーどうかお世話してやってもらえないでしょうか？いや、見ての通りのどうしようもない人間なんですけど。でもそれは修行が足りてないからだと思っんですよ。根は良い子です。本当に。ね？どうです？ついでに働きの口とかも、もしよければ紹介してもらったりして」

光「いやいや」

頼子「一応、そういうコミュニティもありますから、できないわけじゃないですけど」

香織「ね？そうしよう。そのかわり、うちにはもう関わらない。絶縁ってことになるけど、でもあなたのためだもん。無理には誘わないんですよ？だから、私たち家族は間に合ってるんで、入らないってことでも大丈夫ですよね？」

頼子「強制はしません」

香織「瞳さんもその方がいいよね？」

瞳「まあ、そうしていただけると、私も、嬉しいというか」

香織「ね？光、そうしてもらおう。決まり」

光「無理だよ」

香織「これだけ言ってもらってるんだから」

光「無理！絶対無理！嫌だ。無理でしょ！無理だよ、無理無理」

瞳「本人が嫌がってますから」

頼子「……あのさあ……」

香織「わかった、じゃあ二人はどうしたいの？」

頼子「そうね」

香織「ね」

頼子「いや、全然読めないのよ」

香織「どっちにしても、あんたが入るか、もう会わないか、どっちかになるってことじゃない？」

頼子「もう決めましょ。はい、じゃあ、どうするの？」

光「……」

瞳「……」

光「……」

瞳「……」

頼子「え、なにがしたいの？」

香織「まあでも。そういうことでしょ」

頼子「えーと、これからどうすればいい？」

香織「二人で話した方がいいの？」

頼子「二人で話すの？」

香織「まあその方がいいのかな？」

頼子「じゃあ」

香織「ああ、そうね」

頼子「私たち出た方がいい？」

香織「出るよ？いいの？出るからね？」

頼子「ちゃんとしてよ」

香織「行きましょ行きましょ」

頼子「そうね、行きましょ」

香織と頼子が出て行く。

二人きりの静寂。

光は思わず壁を叩く。

ただ、なにに当たってるのか光自身もわからないよう。

瞳「……なんか、ごめん」

光「いや、こつちが」

瞳「うん」

光「まあ……でも……ねえ……」

瞳「……うん……いやーこんな感じになるかあ」

光「まさか、ねえ」

二人は少し笑い合う。

光「俺、週3だけど、週4にするよ」

瞳「え？」

光「あ、バイト」

瞳「うん」

光「なんか、きつかったら言って」
瞳「……うん、そっちも」

隣から壁を叩く音。

それは仕返しにも、応答にも聞こえる。

三場・海

8月。

夕方の海。

プライベートビーチと言わないまでも、ほとんど地元の人しか知らず、海水浴客もない。

その分、岩場も多く、入江のような浜。

一人、黄昏ている真希。

そこに斎藤が現れる。

斎藤は一眼レフを構え、真希に向けている。

ゆっくり近づいてくる斎藤。

真希「……え、なに？」

斎藤「……いい絵だなあと思っ」

真希「……動画？それ動画？」

斎藤「はい」

真希「ちよつとやめてよ」

斎藤「はい」

真希「……いや、止めてっ」

斎藤「え、もうちよつと、いいですか？」

真希「は？」

斎藤「いい絵なんで」

真希「無理」

斎藤「すみません」

真希「止めるって言っ」

斎藤「あ、はい」

斎藤はボタンを押して止める。

真希「……」

斎藤「なんか、すみません。そういうの、わかってもらえるかなと思っ
たんですけど」

真希「はあ？」

斎藤「いや、いい絵だったんで」

真希「消して」

斎藤「はい？」

真希「データ消して」

斎藤「ちよっと、勘弁してくださいよお」

真希「消して……消して……消せって」

斎藤は泣く泣くデータを消そうとする。

真希「確認するから」

斎藤は真希に画面を見せながらデータを消す。

真希は呆れたように離れるが、斎藤は居続ける。

斎藤「……海、良いつすねえ」

真希「……あのさ、みんなの前だと変な空気になると思ってあんま言わなかったけど、斎藤くんさ、来年から社会人なんだよね？」

斎藤「はい、そのつもりでいます」

真希「つてか、今、就活してるんだよね。礼儀とかって、だいたい見られるのそこだよね？」

斎藤「……」

真希「別にそれは大学生でも変わんないと思うんだけどさ、まあ例えば映画なら映画でいいよ。映画作るのだから、いい映像撮りたいってやっただけじゃダメなわけじゃん。一人でやってるわけじゃないし。そういうのって大事じゃん」

斎藤「はい」

真希「今いくつ内定もらってるか知らないけどさ、つてことはできないわけじゃないんですよ。面接官の前だけじゃなくてさ、それ、普通の生活でも同じだと思うけどね」

斎藤「……内定」

真希「え？何？」

斎藤「……内定、まだ、ゼロです」

真希「……あ、ごめんごめん」

齋藤「……なんか……すみません」

真希「ちよっと、もう……え、何社受けたの？」

齋藤「二社です」

真希「今どき受験でもうちよっと受けるでしょ」

齋藤「指定校推薦だったんで」

真希「あーもうそういうこと言ってんじゃないかって。え、業種広げたら？」

齋藤「いや、それは」

真希「求められてるところに行ったらさ、意外とやりたいことそこで見つかったりするから」

齋藤「でも、頑張れば、必ず叶うって信じてるんで、はい、そう思います」

真希「……うっす」

齋藤「は？」

今にも泣きそうな顔で真希を見る齋藤。
そこに光がくる。

光「……どうした？」

真希「どうしたって……」

光「そろそろ帰ろうって」

齋藤「……なんか……本当に……すみませんでした！」

齋藤は走って去っていく。

光「おい、泣かすなよ」

真希「泣かしてないよ」

光「お前、齋藤くんにあたり強いって」

真希「イライラするんだよね、ああいう子見てると」

光「まあ、気持ちわかるけどさあ」

真希「でもいじめてるわけじゃないでしょ。ショック療法よショック療法。」

一回こっちでへし折っというあげないとき、ポキって折れた時に、取り返しがつかなくなっちゃうじゃない……そのー光みたいに」

光「は？」

真希「……冗談だって（笑）あああ、大戸が来てたらなあ。もうちよっと

円滑にやってくれただろうね」

光「最近大戸に会ったりした？」

真希「たまに飲みに行くけど」

光「そっか。あいつ俺の連絡、露骨に無視するんだよね」

真希「嫉妬してるんじゃない？」

光「え？」

真希「光に彼女できて」

光「いやいや」

真希「いい子だよ、瞳ちゃん」

光「まあ、うん」

真希「憲仁もずっとデレデレじゃん」

光「ああ、まあ、瞳も乗せるのうまいから」

真希「あの人さ、結婚してから逆に歯止め効かなくなってきた。ねえどう思う？結婚してるからそういう心配ないからね、だって結婚してるもん、そんな気まではないからねって近づいてって結局最後までいっちゃうんだって」

光「あ、末松さん、そういう」

真希「不倫よ不倫。バレバレのやつ」

光「そっか。なんか、大変だなあ」

真希「そういう意味では光の方が安心だったわ。取られる心配ないし」

光「……さつきからさ、なんなの？」

真希「……なんだろうね。ここ来ると思い出しちゃうのかなあ。いろんなことがどうにもなるって思ってた頃のこと」

光「……大戸から聞いたんだけどさ」

真希「言っていないよ」

光「え？」

真希「付き合ってたこと、言っていない」

光「うん」

真希「不満？」

光「いいや」

真希「じゃなきゃ付き合えなかったもん」

光「そうだと思う」

真希「なんか、ムカつくわ、その感じ」

光「は？」

真希「……私も大戸から聞いた」

光「……」

真希「瞳ちゃんのこと」

光「そっか」

真希「大戸はだから来なかった」

光「……そっか」

真希「私はね、会って、この子変だよ、おかしいよね、って袋叩きにして、光の目覚ましてあげようと思ってたの……でも、拍子抜けだし、なんならうまく立ち回るし、え、なんなの？」

光「なんかさあ、世界って今年中に滅亡するのね」

真希「……あの、ごめん、もう、その段階なの？」

光「いやいや、俺は違うけど、でも、そこは共感というか、なんかそこで馬が合ってるというか」

真希「え、なに言ってるの？」

光「滅亡したらいいなあって思う時ってない？正直、しんどいじゃん、あと半分以上生きるの。だったらさ、スパッと終わってくれたら楽だなって。こんな俺でも、このまま、一応最後までいけそうじゃん」

真希「……」

光「瞳だって、そう、思ってるんじゃないかな。きっと、会の人以外に相手にされないわけじゃん。こいつだったらちようどいいって思ったよ絶対。ちようどよくないからお前は俺を捨てたわけでき。こっちはさ、ちようどいいんだよ。お前なんかより全然一緒にいれるもん」

真希「……逃げ回ってるだけじゃん」

光「瞳と逃げ回れるならそれはそれでいいのか」

真希が光の顔を叩く。

真希「努力したら何かしら報われるって思ってたやっつけられないんじゃないの、普通？」

光「……ごめん」

真希「……こっちもごめん……あ、やばい、私……斎藤と同じこと言ってるわ……」

きやつきやと瞳が走って来る。

瞳「やだ、やめてくださいよー！助けて！（笑）」

酔っ払った憲仁が来る。

憲仁「瞳ちゃん！瞳ちゃん！待ってよー！」

真希と光の視線に気づく憲仁。

憲仁「真希ちゃん！真希ちゃん！」

真希の腰に抱きつく。

憲仁「つかまえたー！」

真希「離してよ」

憲仁「真希ちゃん」

真希「離してって」

真希は憲仁を振り払う。

憲仁は寝転がってジタバタする。

憲仁「うわー、助けてー、立てないよー」

真希「ほら逃げよ逃げよ」

瞳「はい！」

走って去っていく瞳と真希。

光「助けましょうか？」

憲仁「大丈夫」

光「相当酔ってますね」

憲仁「お前、最もな冷めること言うなよー」

光「すみません」

憲仁「光！楽しんでるかー！」

光「はい。楽しんでます」

憲仁「おいおいおいおい」

光「はい？」

憲仁「なんだ？記憶が蘇ってきちやうか？」

光「え？」

憲仁「カメラ落としたの、あの辺かあ」

光「……」

憲仁「そんな顔すんなって。俺は知ってるよ。お前がさ、死に物狂いでや
ってたこと」

光「いやいや」

憲仁「その後さ、みんなに内緒で何件も修理回ったこと」

光「え、あ、あ、はい」

憲仁「この海にはさあ、お前の涙が混じってるわけじゃん」

光「はあ」

憲仁「だろお？」

光「はい」

憲仁「海はさあ繋がってるんだよ。お前の涙も繋がってるわけじゃん」

光「え？は？」

憲仁「だろお？」

光「はい」

憲仁「しょっぱいけどさあ、ちゃんと繋がるんだって」

光「あの、さっきからずっと何言ってるんですか？」

憲仁「んあ！？なんだお前！」

光「すみませんすみません」

憲仁「だから瞳ちゃんつかまえられたわけだろお、繋がってるから！」

光「はい」

憲仁「あんな可愛い子捕まえてよ！なんでお前なんだよ！」

光「僕もそれは思いますけど」

憲仁「同感してちゃダメだぞ！言い争え！言い争え！」

光「は？」

憲仁「そうだ！結婚しろ！」

光「飛びすぎですって」

憲仁「いいぞ、結婚は。責任感がなあ、全然違うって。思ってる以上に別世界だぞ。いいぞお」

光「はあ（苦笑）」

憲仁「そしたらお前も真っ当にならなきゃいけないくなるだろ。環境がさ、環境がお前を変えるんだよ！」

光「どうですかね？」

憲仁「だって瞳ちゃん可愛いだろ。可愛いよなあ」

光「まあ、はい」

憲仁「（遠くに）あ！瞳ちゃん、それ、俺が運ぶって！」

憲仁は行こうとして砂浜に転ぶ。

光「ああああああああ」

憲仁「はっはっはっは、邪魔するなあ！」

光「はいはい」

憲仁「光！俺たちはなあ、どこまでも突き進むんだあ！」

光「はいはい」

光が憲仁を介抱して去る。

四場・駅前

9月。

駅前の広場、待ち合わせのスポット。
行き交う喧騒の中で、立っている大戸。

誰かを待っているよう。

時々周りを見渡しながら、携帯をいじっている。

そこに、ボードを持った瞳が現れる。

大戸を観察しつつ、近づく。

瞳「すみません」

大戸「……はい？」

瞳「あの、意識調査のアンケートにご協力いただけませんか？」

大戸「あ、大丈夫です」

瞳「2、3分で終わりますんで」

大戸「いや、すみません」

瞳「ご協力いただけませんか？」

大戸は逃げるように場所を移動する。

しばらく、瞳は別の人に声をかけようとするが、

再び大戸に標準を当てる。

瞳「すみません」

大戸「え？」

瞳「待ち合わせとかですか？」

大戸「まあそうですけど」

瞳「簡単なアンケートで2、3分で終わるんで」

大戸「え、しつこくないですか？」

瞳「すみません」

大戸「ちよっと、勘弁してもらっていいですか？」

瞳「あの、気になってしまっって」

大戸「は？」

瞳「ごめんなさい、こんなこといきなり言うのも失礼なんですけど、最近

なんかありました？」

大戸「え、なんですか？」

瞳「ちよつと、気になる、というか」

大戸「そんなの誰だつてあるでしょ」

瞳「いや、何かで、困ってます？困ってますよね？」

大戸「これに、困ってます。だから、もうやめてください」

瞳「初めまして、ですし、いきなりすぎますけど、よかったらお話し聞きますよ。なんか、気になる、というか、ちよつと心配になる感じなんですよ」

大戸「は？え、なにがですか？」

瞳「なんでしよう、その、私、ちよつとそういうの見える方で」

大戸「お願いなんで、もう、いいですか？」

瞳「近くの喫茶店とか、入ります？」

そこに香織が現れる。

香織「ごめん、ごめん、待った？」

大戸「あ」

香織「久しぶり……あ」

瞳「あ」

香織「え、今日、呼んだつてこと？」

大戸「え？」

香織「いや」

瞳「え、あ、お久しぶりです」

大戸「今、なんか、アンケート……」

香織「アンケート？」

大戸「え、知り合い、ですか？」

香織「え？」

大戸「はい？」

香織「え、だつて、光の」

大戸「……」

瞳「……すみません、なんか、お邪魔してしまつて。じゃあ、失礼します」
大戸「ちよつと待つててください。待つてくださいよ！」

大戸は瞳の腕を掴む。

瞳「離してください！」

大戸「困ってます！」

瞳「はい？」

大戸「あなたのことで、困ってます！」

瞳「知りません」

大戸「見えたんですよ？それです」

瞳「今は見えないんで大丈夫です」

大戸「ちよつと喫茶店入りましょう。一緒に」

瞳「やめてくださいよ！」

瞳は掴まれた腕を振りほどく。

瞳「興味、なかったじゃないですか」

瞳は軽く会釈して足早に去る。

香織「……本当に、こういうことって、やってるんだね」

大戸「はい」

香織「ちよつと、ねえ……」

動揺を隠せず、どぎまぎした時間が流れる。

香織「……あの、ごめんね、今日、わざわざ」

大戸「いいえ」

香織「元気だった？光とウチ来たぶりだもんね」

大戸「はい」

香織「どっか、入る？喫茶店でも」

大戸「あの……もう、ここで、済ませませんか？」

香織「え？」

大戸「僕、多分、そんなに喋ることないんで。会ってないんですよ、全然」

香織 「まあ、でも、一番、光のこと知ってるだろうし」

大戸 「その、協力はしたいんですけど」

香織 「え？どうした？」

大戸 「いや、なんか……」

香織 「ごめんごめん、こっちも手探りで、埒あかなくて。それで」

大戸 「あの、こんなこと言いたくないんですけど……正直、巻き込まれたくないんですよ」

香織 「巻き込むとか」

大戸 「だって、そうじゃないですか、やり口一緒ですよ、あの人と」

香織 「え」

大戸 「喫茶店行こうって」

香織 「そりゃ」

大戸 「行つて、どうするんですか？」

香織 「……逆に、行つてどうするつもりだったの？」

大戸 「は？」

香織 「いや、あの子と」

大戸 「あ」

香織 「……なんとか、したいのね」

大戸 「……」

香織 「そういう気持ちは、あるよね？大戸くんにも」

大戸 「えーと、あの、残酷なようですけど、全くありません」

香織 「え？」

大戸 「むしろ、迷惑なんです、こういうの」

香織 「じゃあ、なんで来たの？」

大戸 「……」

香織 「なんで、あの子のこと、ガツガツ、喫茶店に誘ったの？」

大戸 「……だから、面と向かっちゃうと、こうなっちゃうんですよ」

香織 「あるじゃん。あるよね？」

大戸 「……すみません！」

走って去る大戸。

五場・集会所

10月。

会の集会所。

オフィスよりは少しだけ生活感が漂う

こざっぱりとした雑居ビルの一室。

会報の封書作業にかかる瞳と頼子。

頼子「……まったくさあ」

瞳「……ねえ」

頼子「……まったくねえ」

瞳「嫌だつて言ってるわけじゃないの」

頼子「そうそう、そうなの、だって修行なんだから」

瞳「そう、だから喜んでやるわけじゃない？ 私たち」

頼子「わかるわかる」

瞳「でも、さすがにさあ」

頼子「……やめましょ、天から見られてる」

瞳「そうよねえ」

作業を続ける二人。

頼子「……悪口じゃないのよ。悪口じゃないんだけど、段取りがさあ、悪

いのよ。段取りが」

瞳「先月も私たち二人だった気がする」

頼子「そうよ」

瞳『あなたたち慣れてるわよね？慣れてる人がやったほうがいいと思うの』

いや、封筒に入れて宛名書くだけなんだから誰がやっても変わんない
つて。絶対忘れててギリギリになって思い出しただけじゃん」

頼子「こっちは昼間さんざん勧誘回ってさ、普通に明日からまた仕事なわけじゃない」

瞳「平日昼間の主婦層にやらせりゃいいのよ、人数いるんだしさ」

頼子「もうさ、あの言い方がさ、人にも頼む言い方じゃないのよ」

瞳『ごめんねえ、階級が違うから手伝えないの』

頼子「あれ腹たったわ」

瞳「ね」

頼子「あいつだけは絶対救われなと思う」

瞳「……それはダメじゃない？救う救わないは私たちで決められないから」

頼子「今の、ダメだった？」

瞳「うん」

頼子「そうよね」

瞳「天から見られてるから」

頼子「あー、ダメだ私。堕ちてる」

瞳「ごめん、私も堕ちてたわ」

頼子「やめよやめよ」

瞳「そうね」

作業を続ける。

頼子「……ノルマ、どう？」

瞳「え？」

頼子「ノルマ」

瞳「んー、きついけど、なんとか」

頼子「私今月も無理っぽい」

瞳「そっか」

頼子「緊急体制でさ、ノルマ増えたじゃない？あれから一回も達成できてないのよね」

瞳「最後の日近づいてるからねえ、え、もうあと2ヶ月ぐらい？」

頼子「実際問題、ノルマきついよねえ」

瞳「もうさ、救われなくなきや救わなきやいいじゃない。その人の勝手じゃない」

頼子「それはダメよ」

瞳「え？」

頼子「だって、全世界救わなきや」

瞳「ああ」

頼子「いや、あんた堕ちてる」

瞳「そっちも大概でしょ」

頼子「え？」

瞳「いや、なんでもない、ごめんごめん、うん、なんでもない」

頼子「……瞳さ、別れたから言うけど、あの男に囚われてからさ、ちよつとおかしくなってると思う」

瞳「そう？」

頼子「そうよ。別れてからちよつとましになってきたけど」

瞳「そうかな？」

頼子「そうよ」

頼子が名簿を見て。

頼子「あんたまた新規増えてるじゃない」

瞳「あ、うん」

頼子「これ、どこの？」

瞳「ああ」

頼子「え？」

瞳「まあ、適当に」

頼子「また？」

瞳「え？」

頼子「だから、新しい彼氏ってこと？」

瞳「いやいや、その人はそこまでいかないでもいけた」

頼子「いいわよねえ、あんた」

瞳「なんで？」

頼子「彼氏じゃなくても、どこまでいったの？」

瞳「まあ、どうだろうねえ」

頼子「いい加減よしたら？」

瞳「え？何を？」

頼子「いや、今はいいかもしれないけどさあ」

瞳「今は、って、もうすぐ終わるじゃない」

頼子「……なんか、ちよつと、汚い感じもするし」

瞳「は？」

頼子「だってそうじゃない」

瞳「え？何？文句ってこと？」

頼子「ずっと思ってたけど、やっぱりやり方が汚いわよ」

瞳「頼子さんと違ってノルマ達成してるんだけど」

頼子「え？何？」

瞳「できない人に言われたくはないかも」

頼子「ちよっと待って。今のは堕ちた人の考え方だよね？」

瞳「ああ、そうね。でも私このやり方しか知らないのよ。手っ取り早いので

むしろ何が悪いの？信仰の入り口作ってあげてるだけじゃない。それでその気になってくれるんだから」

頼子「そうだろうけど。あの男みたいなタイプもいるわけじゃない。貢ぐだけ貢いでさ」

瞳「その話もうよくない？」

頼子「心配なの。あんたが堕ちたら元も子もないじゃない」

瞳「もう大丈夫だから」

頼子「そう？」

瞳「大丈夫」

頼子「……じゃあ、この人の大学、確かあの男と同じだけど関係ないのよね？」

瞳「え？」

頼子「あの男の知り合いつてことじゃないのよね？」

瞳「違う違う、たまたまよ、たまたま」

頼子「じゃあいいけど」

瞳「……もしかしたら、繋がってるかもね。先輩後輩なわけだし。私は知らないけど」

頼子「そう」

作業を続ける二人。

頼子「……じゃあ私、ノルマやばいし、もう一回あの男、光くんだけ？」

瞳「押ししてみようかな」

瞳「なんで？」

頼子「え？」

瞳「え？」

頼子「いや、だって、あなたはもう繋がってないのよね？」

瞳「でもさ、やめたほうがいいんじゃないかな」
頼子「どうして？」

瞳「脈ないわよ。あれだけやったんだから」

頼子「……あんたさあ」

瞳「え？」

頼子「もー」

瞳「何よ」

頼子「え？どういふつもりなの？」

瞳「言ってる意味がわかんない」

頼子「ああそう」

瞳「うん」

作業を続ける二人。

瞳「……私だつてさあ」

頼子「え？」

瞳「……私だつてわかんないわよ。どういふつもりか」

瞳の作業の手が止まる。

六場・姉夫婦のマンション

11月。

引っ越し作業中の香織夫婦のマンション。

香織の夫、向井武士と光が荷物を運んでくる。

香織が来て。

香織「とりあえずオツケー」

武士「休憩しよ」

香織「そうね」

武士「あ、じゃあ、引越し屋さんに」

香織「うん」

武士「ちよつと行ってくるわ」

香織「あ、いいや、私行ってくる。ついでに飲み物でも買ってくるわ」

武士「ああ」

香織出て行く。

武士「光くん、手伝ってくれてありがとう」

光「いえいえ」

武士「これ、手伝ってくれたお礼。そんなに多くないけど」

光「あ、いや、でも」

武士「いって。香織帰ってこないうちに」

光「……すみません」

光が封筒を受け取ってしまう。

二人は疲れでぐったり横になる。

武士「どう?」

光「え?」

武士「どう?最近」

光「いや、まあ、可もなく不可もなくです」

武士「そうか」

光「はい」

武士「彼女、できたんだって？」

光「え」

武士「はっはっは。ごめんごめん」

光「姉ちゃん余計なことを」

武士「いやいや、ごめんごめん」

光「別に、全然いいですけど」

武士「いいの？」

光「まあ、普通に」

武士「そっか。まあ、あれだねえ。いろいろ大変らしいねえ」

光「……そんな風には思っていないです」

武士「ならよかった」

光「……」

武士「光くんはさあ」

光「はい」

武士「これからどうしてくの？」

光「……」

武士「漠然としすぎたか」

光「……そうですね」

武士「いやいや」

光「すみません」

武士「なんでなんで」

光「いや、こんな、ふらふらしてて」

武士「何？お金のことに気にしてる？」

光「……」

武士「あれはさ、光くんへの投資だから」

光「……すみません、いつか絶対返しますんで」

武士「……じゃあ返してもらおうかな」

光「え」

武士「返してよ」

光「……」

武士「実はね、独立して、まあまだただけど、少しだけ軌道に乗って来たというか。それでね、まあ、その、人手がね、足りないのね」

光「……」

武士「光くんさあ、ウチで働かない？」

光「え、あ、その」

香織が缶ジュースを買って帰ってくる。

香織「はい、好きな選んで」

武士「いいよ、光くんから」

光「あ、すみません」

香織「何？何？何の話？」

武士「光くんにさ、ウチで働かないかってお願いしてみた」

香織「……」

武士「どうかな？」

光「まあ、その」

香織「あんたねえ」

武士「いやいや、返事はさ、よく考えてからでいいから」

香織「ちよつと光」

武士「いいっていいって」

香織「あなたもあなたでしょ。そうやって甘やかし続けてさあ」

武士「そんなこと言うなよ。やつと光くん雇えるぐらいの余裕出てきたん

だから。俺の勝手だろ」

香織「んー、私としてもさ、そこまでされると申し訳ないのよ。ねえ光」

光「……」

武士は立ち上がってダンボールの中から

新聞を取り出し光の前に置く。

武士「光くんはさあ、5年後何やってる？」

光「え？」

武士「5年後」

光「……」

武士「これ、読んだ？」

光「全然読んでないです」

武士「瞳さん？が持ってきたっていう新聞。香織が持って帰ってきて」
香織「……」
武士「もうちょっとだね。世界が終わるまで」
光「らしいですね」
武士「瞳さんは、どうなるの？」
光「……消えてなくなるんじゃないですか？」
武士「そう」
光「はい」
武士「じゃあ5年後もないねえ」
香織「バカバカしい」
武士「そうかな？」
香織「バカバカしいわよ。そうやって触れ回って金巻き上げてるわけですよ。あーダメだ、止まらなくなっちゃうから」
光「いいんじゃないですか？この話は。自分でなんとかしますから」
武士「なんとかできそう？」
光「いや、まあ、はい」
香織「あんたさあ」
武士「いいからいいから」
香織「いやだつてさ、得意なのよ、この子、悪い意味での現状維持みたいななの」
光「そんなつもりない」
香織「でも、現状は、ずっと現状維持になってるわけでしょ？」
武士「ちよつといい？」
香織「なによ？」
武士「落ち着いて落ち着いて」
香織「あーもーあーごめんごめん」
武士「光くんはさ、これ、調べた？どんな団体か」
光「……いや」
武士「彼女が入ってるのに？」
光「知っちゃったら、なんか、変な感じになりそうなんで」
武士「そっか」
光「でも、本当に、それ以外は普通なんですよ。普通に、いいというか」
武士「わかった」

光「……」

武士「じゃあ、一回、変な感じになってみるっていうのはどう？」

光「は？」

武士「ちよつとだけ調べてみたのね」

光「……」

武士「この会はさあ」

光「別にいいんじゃないですか。信じるも信じないも勝手なんだから、好きなようにすれば、って僕は思うんですけど、ダメですか？」

武士「ダメじゃないよ」

光「そうですね」

武士「ただ、それで、どうしようもなく辛い思いや、不幸な思いをしてる人がたくさん出てるっていうのも事実といえは事実なんだよね」

光「……」

武士「被害者の会があつてさ、何回か行つてみたの」

光「瞳は、全然違います」

武士「でも、一応同じ景色は見てるわけだ」

光「それ差別ですよ！じゃあ同じ偏差値低い学校に通ったら、その人はみんな頭悪いってなりますか？一流企業で働いてる人がみんな人のきた善人だつて言えますか？同じこと言ってますよ」

武士「そうですね。でも、そうなってるね」

光「は？」

武士「そう見えるだろうね。光くんも、そう見えてるよ」

光「……」

武士「ごめんごめん、そんなことはどうでもいいの」

光「どうでもいいって」

武士「どうでもいいよ。光くんの言う通りだと思う。見え方なんてどうでもいいよ」

光「じゃあ、いいじゃないですか？」

武士「でも、一人じゃ生きていけないからね」

光「……」

武士「誰かと関わって生きてかざるを得ないからね」

光「……」

武士「そうになると、そのどうでもいいことも、仕方がないけど、そこに関

わってくるだろうね」

光「……」

武士「5年後、光くん、何してる？」

光「5年後」

武士「隣に、瞳さんは、いる？」

光「……」

武士「いる？」

光「……いれば、いいなって、思います」

武士「そうか」

光「思います」

武士「うん」

光「……いたい、です」

武士「じゃあ、光くんが信じてることも、一緒に信じてもらう必要がある

んじゃないかな？」

光「……」

香織が腰をあげる。

香織「お腹減った。減らない？」

武士「ああ、減った」

香織「今日はハナから作る気ないから」

武士「どこ食べに行くか」

香織「適当に探せばあるでしょ」

武士「そうだな。じゃあ、車回してくるわ」

香織「うん」

武士が出て行く。

香織「……なんか、ごめんね」

光「え？なんで」

香織「こんなになるとは思ってたから」

光「嘘つけ。このつもりで呼んだんでしょ、俺のこと」

香織「はっはっは、よくわかってんじゃない」

光「わかるよ、そりゃ」

香織「まあでもさ、あんたもこっちの身にもなってみてよ」

光「俺、会に入れて、絶縁しようって言ってたくせに」

香織「そっかそっか、そうだったね、そういえば」

光「いや、ごめん」

香織「……ぶっちゃけさ、私は、あんたが元気にやってたら、なんだって

いいのかもねえ、本当のところは」

光「……うん」

香織「……やめさせるのってね、すごい体力いることらしいのよ」

光「え？」

香織「さすがに私も、その手の本とか記事とか、目につくようになってさ」

光「そりゃ、そうか」

香織「あの人もすごいんだから。本当言うとな、会ってもいない瞳さん脱

会させるのがライフワークみたいになってるのよ、笑っちゃうでしょ」

光「そんなに？」

香織「でもさ、わかって欲しいのは、それぐらいやってないと、こっちも

まともに立ってらんないのよ」

光「……」

香織が封筒を出して光に渡す。

香織「引っ越し手伝いのお礼」

光「え、いや」

香織「何、珍しいじゃん」

光「あのー」

香織「いらぬならいいけど」

光「あ」

香織「変なの」

光「じゃあ、ありがたくいただきます」

大事そうに封筒を持つ光。

七場・イベントスペース

12月。

映像が観れる貸切イベントスペース。
大学の頃に撮った映画がスクリーンに映し出されている。

斎藤 「波の音と、林の中を走る真希さんの後ろ姿。

その先には、日が沈みかけている真っ赤な海。

砂利道が砂浜に変わる。目の前が開ける。

サンセットと、海と、砂浜を駆ける真希さん。

膝に手をつけて肩で呼吸する。近づくカメラ。

上体を起こした真希さんの目には一筋だけ涙が通る。

沈みかけの夕日で輝いている目。

まるで世界の終わりでそうするように、

真希さんはゆっくり目をつむる」

憲仁、真希、斎藤で観ている。

映画が終わる。

憲仁 「面白いよな？」

斎藤 「はい、面白いです」

憲二 「面白いと思うだろ？お前も」

斎藤 「はい、思います」

憲二 「同じだよな？お前も、一緒だよな？」

斎藤 「はい。一緒だと思います」

憲二 「じゃあ、やめるな？」

斎藤 「え」

憲二 「やめるよな？」

斎藤 「あの、さっきから何度も言ってますけど、それとこれとは」

憲二 「どうしてだよ！」

真希 「ねえ、お願い、目覚まして」

斎藤 「はい、起きてます」

真希 「そうじゃなくて」

齋藤「でも、最後の日に見た映画がこれで良かったです」
真希「は？」

光が入ってくる。

光「すみません、遅れちゃって」

憲二「光、てめえ！（掴みかかる）」

光「え、え、なんですか？」

真希「ちよつとやめて」

光「あの、僕の就職祝いですよね？」

憲二「んなわけねえだろ」

真希「それでも言わないと来ないでしょ。言っても遅刻だし」

光「ごめん、え、なに？映画？」

憲二「いいだろ、このイベントスペース。こいつに映画見せて目覚まさせるんだよ」

光「わかんないわかんない、え？」

真希「齋藤くんがさ、そのね」

齋藤「僕そろそろいいですか？最後は、集会所で迎えたいので」

光「……」

真希「だから嫌だったの！どうすんの！」

光「どうするって？」

真希「大戸が瞳さんといるとこ見たんだって」

光「あ、大戸は？」

真希「来ないよ。あいつこういう時絶対来ないじゃん」

光「そっか」

憲二「こいつがよお、ウチの会社入れなかったからって、ヤケになってお

前の女に取り込まれたんだよ」

齋藤「それは大丈夫ですから。僕は救われたんで、もう大丈夫ですから」

真希「こつちが大丈夫じゃないのよ。私もちよつと言ったし、変な言いが

かりつけられたら困るのよ」

憲仁「あああああああ、お前もわかるよな？こいつは逃げただけだ」

齋藤「だって、あの時は入れてやるって言っただけじゃないですか」

憲仁「無理なのは無理だったんだよ。しょうがねえだろ、こいつにあま

りにも能力がなかったんだよ。だからってよお。ああ、こういう負け犬が俺一番嫌いなんだよ。そうだよな？自分を正当化できる良い薬だよな、救いってのはさ」

斎藤「救いは、救いは、そんなんじゃないやありません」

真希「ねえ、光、助けて。とにかく光の知ってること全部言って」

光「俺は、何も、本当に、何も」

憲仁「俺も誘われたんだよ、瞳ちゃんに」

光「え？」

憲仁「突き返したけど」

光「いや、俺は本当に何も知らないんです。というか知らないようにしてるんですって。だって嫌ですもん。だから、斎藤のことも知らなかったし、末松さんに行ったことも何も知らなかったです」

真希「え、付き合ってるんだよね？」

光「付き合ってるよ」

真希「それ本当に付き合ってるって言えるの？」

光「言えるよ、多分、言える」

真希「本当に使えない」

光「……あの、どうでもいいけど、俺とか、斎藤のこと、ゴミ見るような目で見るとかやめてもらっていいですか？」

大戸が入ってくる。

その後ろに瞳がいる。

真希「え」

瞳「斎藤くんを、解放してください」

憲二「大戸」

大戸「違うんです、すみません」

憲二「何が違うんだよ」

大戸「いや、こんな大ごとになると思ってたなくて、それで、そいつやめさせてもらうには、この人に土下座するしかないと思って、そしたらここに來るって言い出して」

瞳「人権侵害です。監禁を直ちに解いてください」

真希「そっちがでしょ。そっちがじゃない」

憲二「斎藤、映画もう一回見よう。思い出すんだよ、お前が信じてたもの、思い出すんだよ」

斎藤「いや、これは、だから良い映画ですって」

憲二「この映画好きな奴がこんなことになるはずねえんだよ」

大戸「やめましようよ」

憲二「大戸、大戸も見るぞ。懐かしいぞ」

真希「帰って」

瞳「じゃあ斎藤くんを」

真希「いいからあなた帰って」

大戸「もうやめましようって！」

周りは呆気に取られる。

大戸「あ、すみません、その、もう、よくないですか？」

憲二「は？」

大戸「誰の得にもならないですよ、こういうの」

真希「え、なに？」

大戸「その、みんな、よっぽど、人、好きだな、と思って」

光「大戸、どうした？」

大戸「いや、だってそうでしょ。いいじゃないですか、こいつがどうなるうが、こいつの勝手じゃないですか？」

真希「だから、私たちのせいにされたら」

斎藤「そんなつもりはありません」

真希「あんたが良くても、あんたの家族とか出てきたらさ」

大戸「それはこいつの責任でしょ」

斎藤「僕は、僕の意思で入ったんです」

大戸「ってことは、斎藤くんが末松さんのせいにしなければいけないことでしょ？勘弁してくださいよ。冷静になりましようよ。俺はそんな余裕ないです。自分で生きてくので精一杯ですよ。いいんじゃないですか？好きなもの信じれば。絶対なんてありえないのわかりきったことじゃないですか。そうですよね？バランスとってやってくしかかないじゃないですか。……すみません、なんか偉そうなこと言ってる」

光「……大戸、お前、変なこと言ってる」

大戸「は？なんだよ」

光「お前が斎藤のこと話さなかったら、こうはなってなかったじゃん」

大戸「いや、それは、そうだけど」

瞳「じゃあ、なんで私のところ来たの？」

大戸「え、あ、あの時は、その、斎藤をやめさせようと思って」

真希「え、ごめん、大戸はどっちの味方なの？」

大戸「味方とか、そういうのじゃないじゃん」

真希「バランスって何？バランスってそうやってとるの？」

瞳「この人の考え方、卑怯だと思う」

大戸「ちよっと待ってよ」

憲二「大戸、お前、何がしたいの？」

大戸「俺だって、俺だって、無関係でいたらいたいですよ！でも、そう

もいかないじゃないですか。俺なりに、逃げずにやったら、こうなっ

ちやったんですよ！……すみません」

真希「……あのさ、もういい加減、ちゃんと悪者決めよう。どっからどう

見てもあんたじゃん」

瞳「え、全然どう見たかわからない」

真希「ちよっとはさ、かわいそうだと思うでしょ？」

瞳「誰が？」

真希「私たちのこと。一番は光かな」

瞳「光が？どうして？」

真希「えーと、どれぐらい冗談でやってる？」

瞳「全部真面目なつもりだけど」

真希「光はさ、いいように騙されて使われてるわけじゃん、あなたに」

瞳「騙してない」

真希「だって、それで一人捕まえてるじゃん」

瞳「あ、勘違いしちゃってる。斎藤くんは」

真希「いや、だから！あんたのせいでウチらの関係ぐちゃぐちゃになって

るのね。それはわかるでしょ？あんたの彼氏の居場所が壊されてるの。

光はクズだけど、一応血は通ってるのね。だから単純に辛いのに、こう

やって騙され続けているのが。お願いだから、もう関わらないでもらっ

てもいい？」

瞳「捨てたのに？」

真希「は？」

瞳「光を捨てたのに？」

真希「え、何？」

瞳「斎藤くんから聞いた」

光「瞳」

瞳「光と、付き合ってたけど、見込みがないから捨てたって」

憲仁「どういうこと？」

真希「え、ちよっと待って」

瞳「恥ずかしくて憲仁さんに言えないって。光はそんなに汚いものですか？」

憲仁「え、真希、お前、光と？」

光「瞳、やめよう。俺は、そう、汚い人間、汚い人間だと思う」

瞳「え、悔しくないの？悔しいでしょ」

真希「…そうよ、悪い？見込みないもん。憲二さんの方が、全然いいもん」

斎藤「本当にいいですか？」

真希「は？」

斎藤「この人は、瞳さんと寝るだけ寝て、会に入んなかったんです」

憲仁「あ、ちよっと」

斎藤「最低な人間なんです！」

光「え、え」

大戸「末松さん」

憲仁「…いや、あの、違うんだよ」

斎藤「何しらばつくれるんですか？」

光「…瞳、本当なの？」

瞳「……」

光「瞳？」

憲仁「…ああ、俺も、悪いけどさ、でも、誘ってきたのは、そっちだよ」

瞳「でも、嘘をついた」

憲仁「だってそれは、嫌だもん」

瞳「会に入るって言ったのに、この人は嘘をついた」

光「…関係を持ったってこと？」

瞳「え、ダメダメ、誤解しないで、救うためでしょ」

光「いや、ごめん、俺には、ちよっと」

瞳「え、なんで？」

真希「ああ、もう」

瞳「……私、斎藤くんは救った」

大戸「は？」

瞳「斎藤くん、あの時、自殺するって言い出した。この中の誰も救えなかった。私が救った」

斎藤「……それとこれとは」

瞳「え？……関係ある。今日で終わっちゃうの。まだ間に合う」

瞳は契約書を出して。

瞳「今日は特別、ここに名前書くだけでいいの。時間がないの。私みんなのこと救いたい。今なら名前書くだけで入ったことになって救われるから。ほら、みんな書いて。早く書いてってば。救われたくないの？
お願い！書いて。お願い……」

崩れる瞳。

光「……正しいか間違ってるかはわからないけど、でも、単純に、気分は良くないよ。うん、気分は良くない。だから、その、本当のことを言うのと、俺だって、やめてほしいと思ってる、うん、ごめん、思ってる」

瞳は走って出て行く。

終幕・アパート

アパートまでの道のり。
光と大戸。

光「お前さあ」

大戸「なんだよ」

光「お前さあ、俺のこと、避けてたよな」

大戸「そんなことねえよ」

光「……そっか」

大戸「避けてたよ。ごめんな」

光「やっぱりそうだろ」

大戸「当たり前だよ。普通避けるだろ」

光「普通ってなんだ？」

大戸「……めんどくせえなあ」

光「迫害される気持ちってこんななんだって思ったわ」

大戸「なんでだろうなあ。こっちは急にお前のこと嫌いになったわ」

光「今も？」

大戸「は？」

光「今も嫌いか？」

大戸「しらねえよ」

光「そっか」

アパートの入り口に戻る。

大戸「あれ、なんか、すごい臭いじゃね？」

光「え、なんだろ、これ」

大戸「いや、これ、笑えないって」

光「ウチ？」

大戸「いや、ここからでしょ」

光「え、え」

大戸「瞳さんか？」

光「……」

大戸「瞳さんが、何か、やってんのか？」
光「何かって？」

大戸「でも、死臭って、もしかしたら、こんな臭いなのかな？」
光「……どうしよう」

大戸「目が、しばしばするもん」

光「とりあえず、確認する？」

大戸「……俺、帰っていい？」

光「え？」

大戸「いや、人ってそう変わらないって」

光「……いいよ、別に」

大戸「嘘だよ。すぐその交番行ってくる。お前、ここにいろ」

大戸去る。

恐る恐る中に入る光。

自分の部屋の戸を開ける。

中には瞳。

光「瞳？」

瞳「……あ、おかえり」

光「あ」

瞳「おかえり」

光「何した？」

瞳「え？」

光「なんか薬とかまいた？」

光は部屋の中を物色する。

瞳「何もしてない」

光はふと気づいて、

壁を叩く。

音は帰ってこない。

部屋の外に出て、臭いを確かめて帰ってくる。

光 「隣からだ」
瞳 「……」
光 「……もしかしたら、隣の人、もしかするかも、しれない」
瞳 「前兆よ」
光 「え？」
瞳 「前兆だと思う。だって、あと、5分だもん」
光 「行こう」
瞳 「……」
光 「とりあえずここ出よう」
瞳 「私、ここで迎えてもいい？待ってたの。顔見れたし、もう十分」
光 「冗談言ってる場合じゃないって。隣で人がさ」
瞳 「ずっと冗談だと思ってたってこと？」
光 「え？」
瞳 「私が冗談で信仰してると思ってたってこと？」
光 「そうじゃないけど、でも、今は違うよ」
瞳 「いいよ、行って」
光 「は？」
瞳 「来世では会えないけど、でも、ずっと、楽しかった」
光 「……」
瞳 「行かないの？」
光 「……人が、死んでるんだよ、隣で」
瞳 「だから、あともう5分もないから、あるよそういうことは」
光 「ごめん、それ一回ちよっと置いておいて」
瞳 「あ、そっか、わかったわかった」
光 「いや、その」
瞳 「もう大丈夫だから、いいよ、行って」
光 「ここ、俺の部屋だし」
瞳 「そうよね」
光 「うん」
瞳 「私、出て行った方がいい？」
光 「……」
瞳 「でも、最後に会えてよかった」

光「さっきからさ」
瞳「ん？」
光「ちよつとしたハッピーエンドみたいに話すのやめなよ」
瞳「全然そんなつもりない」
光「そりゃ楽だよ。これで終わるんだったら」
瞳「は？」
光「いや、ごめん」
瞳「……そうよね、その、私も、これは押し付けないって約束だもんね」
光「……ああ、もう、わかったって」
瞳「ん？」
光「一緒にいるよ」
瞳「……」
光「うん」
瞳「うん」
光「逆に、あとちよつとなら、信じてもいいのかあ」
瞳「え？」
光「信じるよ、それ」
瞳「まあ、え、いいけど」
光「あとどれくらい？」
瞳「3分もない」
光「そっか」
瞳「ねえ」
光「ん？」
瞳「隣の人は、どんな人生だったんだろうね」
光「ろくなもんじゃなと思う。ゴミ屋敷だし、仕事も多分してないし」
瞳「……私たちは、ろくなもんだったのかなあ……」
光「どうだろう。でも、隣の人は隣の人なりに謳歌したかもしれないし」
瞳「そうね」
光「そればかりは」
瞳「うん」
光「もし、終わらなかつたらさ」
瞳「え？」
光「いや、もしもの話ね。この、どうしようもない現世が続いちやうとし

たらさ、瞳はどうするの？」

瞳「想像すらできないからわからない」

光「俺、就職したのね」

瞳「うん、おめでと」

光「なんか、今までを取り返すみたいな感じで、俺、今だったら、一生懸命やれるというか、働ける気がしてて」

瞳「うん」

光「そしたらさ、瞳と、なんというか、普通に暮らせるといいうか」

瞳「……」

光「もし、これで終わらなかつたらさ、その会も、やめよう。だって嘘だったってことになるんだから」

瞳「……」

光「それでも、いい？」

瞳「……想像できない」

光「うん、今は、大丈夫。全部、終わったらでいいから」

瞳「ごめん」

光「あと1分ぐらい？」

瞳「うん」

光「……俺は、救われるのかな？」

瞳「きつと大丈夫、こうしてれば一緒にいける」

光「隣の人も、救えるのかな？」

瞳「救おう。みんな救ってあげるの」

光「来世かあ」

瞳「もう、すぐ、そこだから」

光は瞳にキスをしようとする。

遮る瞳。

瞳「は？」

光「あ、ごめんごめん」

瞳「え、ちよつと」

光「いや、だって」

瞳「なんかそれさあ」

光「うん」

瞳「ちよっと救われるものも、救われない気がしない？」

光「え？そうかな？そう？」

瞳「うん」

光「でもさあ」

瞳「え、なに？」

光「来世で会えるかわからないしねえ」

瞳「そうだけど」

光「うん」

瞳「え、じゃあ、どうするの？」

光「んー」

瞳「わかったわかった」

光「そう？」

瞳「うん」

光「じゃあ、目つむってよ」

瞳「ええ」

光「ほら」

瞳「もう」

光「早く、時間ない」

瞳「そっちこそ、ちよっとしたハッピーエンドにしようとしてない？」

光「でも、ねえ」

瞳「(笑)」

光「最後だし」

瞳「なにそれ」

光「うん」

瞳「いいよ」

瞳は目を閉じる。

光がキスしようとする。

アラームが鳴る。

瞳「……終わった」

瞳はアラムを止める。

瞳「……終わらなかった」

光「……やった」

呆然とする瞳。

光「……やった……やった……やった……やった！やった！やった！終わった！終わらなかった！終わらなかったよ！先がある。このどうしようもない世の中に先がある！続けている。20秒、21秒、22秒、進んでる。進んでるよ！ねえ瞳！進んでるよ！」

瞳「……」

光「(隣に) こいつは、こいつはなんでもつたいたいことしたんだよ。はっはっはっは、バカバカしい、続けているのに、自分で止めちやっただ、終わると思っつて、終わらないのに。瞳、ねえ瞳」

瞳「……うん」

光「やってこう。一緒にやってこう。これから、一緒に」

瞳「……私」

光「うん」

瞳「私」

光「うん」

瞳「生まれ変われるのかな？」

光「簡単だよ」

瞳「生まれ変わりたい」

光「うん」

瞳「生まれ変わる」

光「そうだよ。うん。そうだよ。できるよ」

瞳「なんか、さあ」

光「なに？」

瞳「でも」

光「なに？なに？」

瞳「私、今、ここで、息してること、想像してなかったのね、本当に」

光「でも、息してるよ。こうやって喋ってるよ」
瞳「うん、だから」
光「これから、ずっと一緒にいれる」
瞳「だけど」
光「死ぬまで、一緒にいれる」
瞳「……ごめん、全然想像できないかも」
光「できなくても、起こっていくんだよ、現実に、ほら」
瞳「やっぱり、ダメかも」
光「え？え？」
瞳「生まれ変わると思うと、ダメかも」
光「そう？俺、今なら不可能なことない気がするけど」
瞳「ごめん、私、なんか、え、急に」
光「え？」
瞳「急に、その、生まれ変わると思うと、急に、なんというか、その、ごめんね、あれかも」
光「だから、なに？」
瞳「……光との、この先が、見えなさすぎるかも……」
光「……え？」
瞳「ちよつと、え、ごめん」
光「……え、ちよつと待って」
瞳「……ごめん、そんなつもり、全然なかったんだけど、でも、考えてみたら、そうじゃない？それは、お互い」
光「待って、待って、俺、全然そんなことない」
瞳「ごめん、こっちも、急に、いや、だって終わらなかったから」
光「ちよつと、ええ、待ってよ」
瞳「え、そんなことない？」
光「いや、だから、俺は、全然ないよ。むしろこれから」
瞳「ごめん、私、あるわ」
光「いや」
瞳「だって、その、ごめんね、こんなこと考えると、本当に、自分でも思ってもいなかったんだけど。でも、急に、現実的に考えちゃうと」
光「えーえー」
瞳「そうね、やっぱり、私、生まれ変わりたいのかもしれない」

光「……え？」

瞳「……ん？」

光「は？」

瞳「あ、いや」

光「……えーと」

瞳「……別れる？」

光「え？ちよつと、え？全然わかんない」

瞳「正直、私、今はもうダメかも、光のこと」

光「なんで？」

瞳「なんでって。今までのこと、考えると」

光「まあ、それはそうか。いや、そうか、だけど。これから、なんでも直

すって、直す、直すよ」

瞳「ごめん、別れよう」

光「ええーええー」

瞳「ごめんなさい」

光「え、じゃあ、俺の何が良かったの？」

瞳「……何が、よかったんだろうねえ……」

光「……」

瞳「ごめんね」

光「……」

瞳「こんなこと、私から言うのは、おかしいけど、お互いさ、その、なんていうの、これから、頑張れると思う。ごめん、こんなんで」

光「ちよつと」

瞳「今まで、ありがとう」

光「え」

瞳「……じゃあ、またね」

光「あ……」

瞳は去っていく。

放心状態の光。

光「ああああああああ」

光の心の叫びが漏れ出てしまう。
やがてダムが決壊するように暴れまわる。
ふと思いついて、カッターナイフを手取る。
手首に近づける。

その刹那、隣の男の叫びが聞こえる。

光は、バカバカしくなってカッターを投げ捨てる。
そして、ため息をひとつつき、
世界の終わりで目をつむる。

終わり

上演許可は「東京夜光」までご連絡ください。

メールアドレス： tokyoyako@gmail.com